

「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」について

下田 研一、平林 昇、柳生 紀子、宮脇 英俊、志波原 智美 (長崎大学附属図書館)

1. はじめに

「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」は、長崎大学附属図書館が、平成16、17年度の科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を受けて構築し、平成18年6月にインターネットに正式公開した画像データベースである（図1）。

搭載している画像のソースは、当館が所蔵する「幕末・明治期日本古写真コレクション」であり、幕末から明治にかけて日本各地で撮影された我が国の初期写真6,026点である。これらの写真には、近代化により急速に変貌しつつある日本の様々な姿が写されており、当時の風景や風俗に関する膨大な情報が埋め込まれている。その多くは、日本にきた外国人が「日本の思い出」として自国に持ち帰ったもので、当館は20年ほど前からこうした古写真を主に海外から購入し収集している。出島を介して日本に写真術が渡来してから写真製版による絵葉書が一般に流行し始めるまでの約50年間の写真が主な収集対象であり、「日本写真のイン

キュナブラ」とも呼びうるコレクションである。

本データベースは古写真研究者と図書館員の協力によって構築されたが、本稿では、構築に至った経緯と目的、構築作業、利用状況や今後の展望について、図書館員の立場から報告する。

2. 構築に至った経緯と目的

長崎大学附属図書館は、本データベース以前に、「幕末・明治期日本古写真データベース」（平成10年正式公開）、「幕末・明治期日本古写真超高精細画像データベース」（平成15年正式公開）という2つのデータベースを構築している。前者では、「幕末・明治期日本古写真コレクション」の全体を対象とし、コレクションに含まれるすべての写真画像を閲覧可能としたのに対し、後者では、コレクションから特に重要な写真501点を厳選して搭載し、画像を最大10倍程度に拡大できるなど、高精細な画像を閲覧できるようにしている。本データベースは前者の後継データベースである。

初代の「幕末・明治期日本古写真データベース」は、本データベースに移行するまでの8年間に約56万件のトップページアクセスを記録した。好評を博した理由としては、日本近代化の諸相を写した古写真という、多くの関心を集め、多面的なアプローチが可能な資料を対象としたこと、インターネットによる古写真画像データベースの公開として前例がなかったこと、全文検索・キーワード検索・地域からの検索・保管棚からの検索などの多様な検索方法と個々の写真に関する十分な解説を備えたことなどがあげられよう。また、56万件のうち27万件は英語版へのアクセスである。海外から集めた古写真の国際性を生かし、日本語版のほかに英語版も備えたが、実際に海外からの利用が多いのも、このデータベースの特徴のひとつであった。

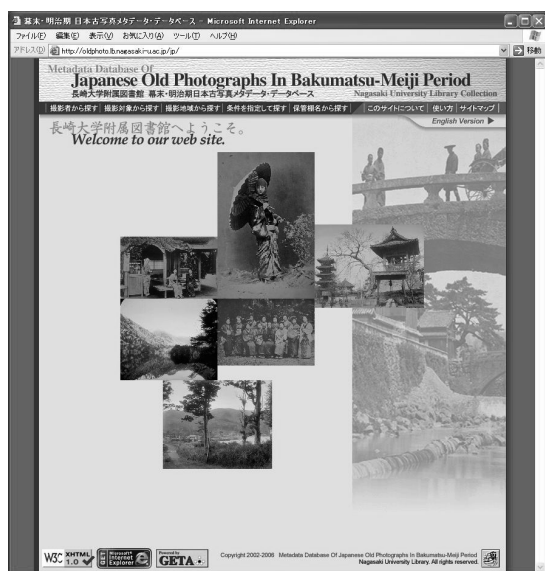


図1 日本語版トップページ

「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」では、初代データベースからデータを引き継ぐとともに、古写真の画像や解説を拡充し、ユーザーインターフェースを一新した。その構築目的は、メタデータ（古写真に関する情報）の形式を国際標準化することにより、国内外の学術情報検索サイトへ当館の古写真情報を発信することにあった。一部実現できなかったものもあるが、構築にあたって課題としたのは次の諸点である。

- ① 新取古写真の追加：初代データベース構築後に収集した古写真610点のデータを追加する。
- ② 古写真解説文の拡充：初代データベース搭載画像5,416点のうち解説文のなかった3,161点の解説を追加する。
- ③ 検索機能の向上：キーワードによる検索画面を見直す。検索可能な地域を細分化する。目録番号による検索を追加する。画像の詳細表示で次画像、前画像への移動を可能にする。日本語版と英語版の切り替え、超高精細画像へのリンクを整備する。
- ④ 管理機能の向上：レコードの個別修正だけでなく、複数レコードの一括修正を可能にするなど機能の多様化と柔軟化を図る。
- ⑤ 利用統計機能の向上：アクセスカウントのみならずアクセス分析も可能にする。
- ⑥ 対話機能の向上：専用のフォームを用意し、感想・意見・情報をきめ細かく収集・整理し、必要な場合は迅速に回答できるようにする。
- ⑦ 古写真利用手続きの簡便化：オンラインでの手続きを可能にする。
- ⑧ メタデータの標準化：Dublin Core等の国際標準的なメタデータ要素セットに準拠する。
- ⑨ メタデータ交換規約への準拠：国際標準的なメタデータ交換規約であるOAI-PMH (Open Archives Initiative Protocol for Metadata Harvesting) に準拠する。
- ⑩ 地域デジタルアーカイブズへの貢献：県内の歴史的資料のデータベース化を先導し、「長崎学デジタルアーカイブズ」の形成を図る。

3. 1 構築作業：古写真の解説文とキーワード

本データベースの構築は、初代データベースのデータを引き継ぐことができたため、ゼロからのスタートではなかった。また、画像の扱いについても、初代データベースや超高精細画像データベースの構築を通して蓄積したノウハウがあった。

データベース更新の目的はメタデータの標準化であったが、他に、新取古写真の画像を追加すること、解説文の数を大幅に増加することも目玉としていた。このうち画像の作成は、オリジナル古写真を撮影したポジフィルムからデジタル画像を起すという単純な工程のため、専門業者に外注すればよい。問題は解説文をいかにして作成するかである。これを図書館員が行うには無理があるため、外部に依頼するより他はない。今回の構築作業で多くの労力を要したのが、解説文の作成に必要な執筆者探しであった。

古写真は風景を写したものと人物を写したものに大別される。まず、風景写真の解説文執筆者探しであるが、古写真に写し出されている情報から撮影場所を特定するには、やはり土地鑑がものをいう。そのため、基本的に地元の人に頼むのがよい。古写真にはあらかじめ撮影場所が付記されているものもあり、それらを基に整理段階で付けた地名情報によって地域ごとに分類し、解説文執筆依頼の準備を行った。

長崎を撮影したものについては、古写真に詳しい学内の教員数名へ依頼した。長崎以外で、すでに初代データベースや超高精細画像データベース作成時に解説が付された古写真がある地域のものについては、執筆実績のある人へまず打診した。ほとんどの方には快く引き受けていただき、そうでない場合にも、代替りの適任者を紹介していただくことができた。まったく初めての場所で該当者が思い当たらない場合には、これまでに出版されている古写真関連資料にあたり、そこに記された執筆者名から適任者を探し出すという作業を行った。それでもなお手掛りがない場合には、地元の教育委員会に電話で事情を話し相談した。教

育委員会の方が、直接執筆を引き受けてくださったり、地元博物館の学芸員などを紹介してくださったりして、なんとかすべての古写真について解説文執筆者を見つけることができた。

一方、人物を写した風俗写真については、被写体を分析して、服飾・料理・交通・暮らしなどといったグループ分けを行い、県内在住のそれぞれの専門家や民俗資料館の学芸員などに依頼した。

古写真の解説文執筆を依頼する際には、キーワードの付与も併せてお願いした。データベースには、撮影者や撮影場所のほかに撮影対象から検索する方法が用意されているが、このためには撮影対象をあらかじめ言葉で表現しておくことが必要である。キーワード付与作業では、1つの画像に対して、初代データベースのキーワード表から、最多4個まで選択してもらい、もし必要なら新たなキーワードを1つ追加することもできるようにした。すべての解説文とキーワードが出揃った段階で、キーワードの見直しと統制を行い、撮影対象からの検索画面を作成した(図2)。

以上のような手順によって解説文の作成やキーワードの付与作業を進めたが、執筆していただいた方は最終的に41名もの多くに上った。

当初、まったく見ず知らずの人にいきなり面倒

な仕事を依頼して、どうなることかと心配した面もあった。ところが、解説文作成のやり取りをするうちに、「高札のこの部分を拡大して送ってもらえれば、文字が読め、研究上役に立つのだが」とか、「この城のこんな写真があったなんて知らなかった。是非この写真を城の復元に利用したい」などといった、思いもよらぬ熱い反響をいただき、完成後の利用のされ方を予見するようで、データベース作成に携わる者として大変な励みとなった。何より忘れてならないのは、解説文作成を通してできた、これらの方々との繋がりである。今後、古写真データベースを発展成長させていく上で、大切なアドバイザーを得たことになり、他に代えがたい貴重な財産である。

3. 2 構築作業：データベースの構築

データベースシステムのハードウェアはFUJITSU PRIMERGY TX200 (CPU Xeon 3.2GHz、Memory 2GB、HDD 882GB)を使用し、ソフトウェア構成は、OSがRedHat Enterprise Linux 3.0 ES、WebサーバはApache、データベースサーバはPostgreSQL、検索CGIのプログラミングにPHPを使用している。

データベースの設計にあたっては、次の5点を主な開発目標とした。実際の作業は、初代データベースの開発と同じ業者に委託することになったため、スムーズに行うことができた。

- ① 各種検索画面のデザイン更新：本データベースで提供する検索画面は、「撮影者から探す」、「撮影対象から探す」、「撮影地域から探す」、「条件を指定して探す」、「保管棚名から探す」の5つである。初代データベースでも同様の検索画面を提供していたが、利用者からいただいた意見をできるだけ反映し、さらに使いやすいシステムを目指した。具体的には、「撮影対象から探す」では、画面設計時に検索用キーワードを統制するとともに大分類をして体系を分かりやすくした。また「撮影地域から探す」では、初代データベースで地方ごとの検索だったのを地名ごとに検索できるようにした。「条件を指

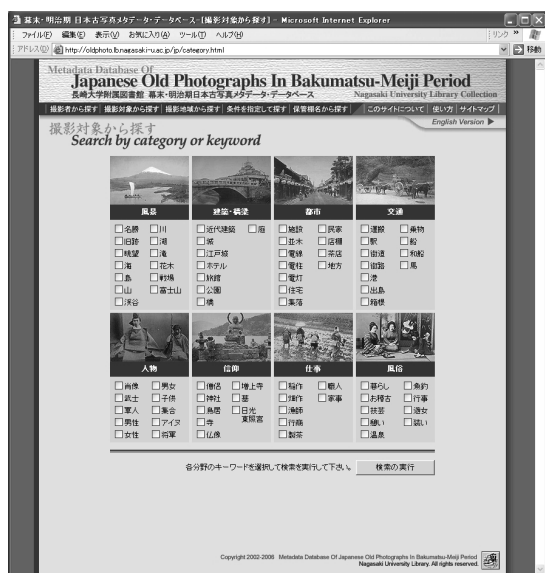


図2 撮影対象からの検索画面

定して探す」では、目録番号から直接検索することを新たに可能とした。

- ② 連想検索機能の追加：新しい検索の仕組みとして「連想検索」を導入した。国立情報学研究所の研究グループが開発したオープンソースのソフトウェア「汎用連想検索エンジン (GETA)」を組み込み、「二つの文書の中に出てくる単語の使われる頻度を比較して、共通の言葉が多く使われていたらその二つの文書は関連がある」という考え方に基づいた検索を行う。画像連想検索の検索窓には、長い文章や思いついた言葉を何でも入れることができる。それらの言葉と各画像の解説文の中に出てくる単語の使われる頻度を比較して、関連性の高い画像を検索することを可能とした。

- ③ 類似画像表示機能の追加：6,026点の古写真の中には、同一原板の画像や同一主題の画像が存在する。そのような画像はタイトルを「同一タイトル (連番)」に統制し、検索結果の詳細画面に「この写真に関連する作品」というボタンを設け、ボタンを押すと別画面でその画像と同じタイトルの画像が表示されるようにした。当初は、各画像の解説文を「汎用連想検索エンジン」で比較することにより関連画像を得る方法を考えたが、結局、より単純な方法でこれを実現することにした。

- ④ 外部データベースとのリンク：超高精細画像データベースに収録されているものについては、検索結果の詳細画面に「超高精細画像を見る」というボタンを表示し、ボタンを押すと別画面で高精細画像が表示されるようにした。また、全ての画像の詳細画面に「関連書籍を探す」というボタンを表示し、ボタンを押すと国立情報学研究所のWebcatPlusの画面が開くとともに、検索窓には当該古写真のタ

Title	日本語タイトル
Title (Alternative)	英語タイトル
Creator	撮影者(日本語表記)
Creator (Alternative)	撮影者(英語表記)
Subject	キーワード
Description	解説文
Publisher	「長崎大学附属図書館」に固定
Contributor	該当目なし
Date	データ登録・更新日付
Type	imageに固定
Format	目録番号、色彩、サイズ
Identifier	詳細表示画面のURL
Source	「幕末・明治期日本古写真コレクション」
Language	jpn_eng
Relation	データベースストップページのURL
Coverage	地名
Rights	Copyright (c) 2005- Nagasaki University Library. All rights reserved.

図3 Dublin Coreへのマッピング

イトル・撮影者・解説文が自動的に入力され、関連図書の検索が行われるようにした。

- ⑤ メタデータの標準化：初代データベースの各画像のデータ項目は、当館が独自に設定したものであった。本データベースでは、メタデータの国際的な規格であるDublin Coreに則って各画像のメタデータを記述することとし、そのようにデータ項目を設定した(図3)。また、メタデータ交換のための国際標準規約であるOAI-PMHに準拠することにより、メタデータの自動収集・自動配信に対応した(図4)。

```

- <metadata>
- <oai_dc:dc xmlns:oai_dc="http://www.openarchives.org/OAI/2.0/oai_dc/"
  xmlns:dc="http://purl.org/dc/elements/1.1/"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  xsi:schemaLocation="http://www.openarchives.org/OAI/2.0/oai_dc/
  http://www.openarchives.org/OAI/2.0/oai_dc.xsd">
  <dc:contributor>日下部金兵衛</dc:contributor>
  <dc:contributor>Kusakabe, Kinbei</dc:contributor>
  <dc:coverage>横浜</dc:coverage>
  <dc:coverage>Yokohama</dc:coverage>
  <dc:coverage>年代未詳</dc:coverage>
  <dc:coverage>unknown</dc:coverage>
  <dc:creator>日下部金兵衛</dc:creator>
  <dc:date>2005-03-18T06:22:13Z</dc:date>
  <dc:date>2005-03-18T06:22:13Z</dc:date>
  <dc:date>1998-04-01</dc:date>
  <dc:date>2005-03-18T06:22:13Z</dc:date>
  <dc:date>2005-01-14</dc:date>
  <dc:identifier>http://hdl.handle.net/123456789/8</dc:identifier>
  <dc:description>英語で「バンド、横浜」と記されている。横浜外国人居留地のバンドすなわち、1番から20番までの海岸通を境頭から撮影したものである。ユナイテッドクラブ、クラブホテル、オリエンタルホテル、グランドホテルなどが軒を並べていた。
  </dc:description>
  <dc:description>The caption reads "Bund Yokohama" in English. The Bund in the foreign settlement of Yokohama from No.1 to 20 Kaigan Dori photographed from the pier. The United Club, Club Hotel, Oriental Hotel and Grand Hotel stood there.</dc:description>
  <dc:format>カラー</dc:format>
  <dc:format>color</dc:format>
  <dc:format>207X262</dc:format>
  <dc:format>207x262</dc:format>
  <dc:format>text/html</dc:format>
  <dc:language>en_US</dc:language>
  <dc:publisher>長崎大学附属図書館</dc:publisher>
  <dc:rights>Copyright (c)2005-Nagasaki University Library.All rights reserved</dc:rights>
  <dc:source>幕末・明治期日本古写真コレクション</dc:source>
  <dc:source>Japanese Old Photographs in Bakumatsu-Meiji Period</dc:source>
  <dc:subject>街路,近代建物</dc:subject>
  <dc:subject>street,modern building,,</dc:subject>
  <dc:subject>210.58</dc:subject>
  
```

図4 自動収集対応メタデータ

4. 1 利用状況：アクセスの統計と分析

1998年10月から2008年6月末までの全古写真データベースの累積アクセス数は1,404,875件である(図5)。

1998年10月に初代データベースを公開した後、超高精細画像データベースを追加したのが2002年5月からであり、この2つのデータベースのトップページアクセスの合計で50万件を突破するのに2,000日近くを要した。その後50万件から100万件までが約900日と約2倍の早さに加速したわけだが、これは2006年6月に本データベースを公開してから、アクセス数が倍以上に増加したためである。本データベース公開前までは月に4,000～5,000件であり、公開後は12,000～15,000件へと飛躍的に伸びている。これはやはりメタデータを標準化したのが故であろう。また、Googleなどの検索エンジンのクローラを得やすいためであろう。事実、検索エンジンに上位でヒットする。上位ヒットならばそれだけ頻繁にアクセスされる。また、初代データベースでは日本語版と英語版とのアクセス数がほぼ同水準で推移していたが、本データベースになってからは日本語版が英語版の10倍以上のアクセス数となった。国内での古写真人気の高さの故であろうか(図6)。

分析にも限界があり、データベース管理者にもわからない数字の推移がある。それは、2005年12月に、超高精細画像データベースが約7,000件と、それまでの倍以上の増加をみるのであるが、何故

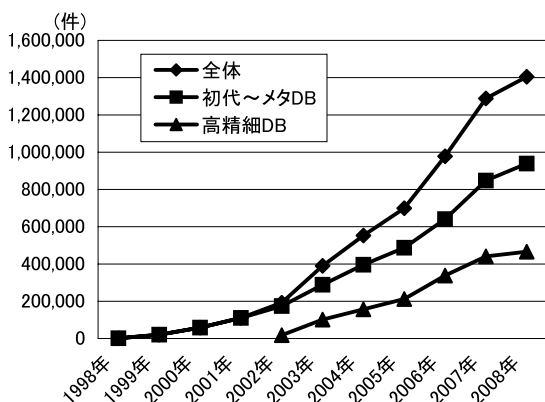


図5 累積アクセス数

年月	初代～メタDB		高精細DB		
	日本語	英語	日本語	英語	
1998年	1,311	7			
1999年	8,124	11,184			
2000年	14,309	23,843			
2001年	19,465	32,050			
2002年	28,093	35,926	17,159	899	
2003年	65,174	48,984	77,311	5,997	
2004年	55,170	52,490	43,497	11,673	←50万件突破
2005年	49,223	41,851	43,007	12,224	
2006年	113,236	40,111	108,337	17,583	
Jan-06	6,614	3,776	10,424	1,602	
Feb-06	5,836	4,043	10,790	1,597	
Mar-06	5,639	3,520	10,201	1,643	
Apr-06	5,167	3,251	9,738	1,533	
May-06	6,553	3,984	8,375	1,564	
Jun-06	12,069	2,786	9,251	1,473	←メタDB公開
Jul-06	11,278	2,680	9,078	1,601	
Aug-06	10,982	2,145	7,564	1,261	
Sep-06	15,416	5,016	9,075	1,536	
Oct-06	10,875	3,730	7,491	1,389	
Nov-06	13,495	2,901	9,151	1,362	
Dec-06	9,312	2,279	7,199	1,022	
2007年	181,780	25,302	91,129	12,080	←100万件突破
Jan-07	20,706	1,866	7,876	1,101	
Feb-07	10,406	2,268	7,204	953	
Mar-07	10,965	2,466	8,035	1,031	
Apr-07	21,532	3,396	9,362	1,223	
May-07	21,634	3,036	7,907	938	
Jun-07	13,313	1,685	7,026	888	
Jul-07	12,436	1,800	7,398	1,020	
Aug-07	11,532	1,846	6,915	981	
Sep-07	10,919	1,493	6,698	892	
Oct-07	12,815	1,939	7,628	1,117	
Nov-07	16,152	1,996	8,023	1,012	
Dec-07	19,370	1,511	7,057	924	
2008年					
Jan-08	16,318	1,735	3,296	741	
Feb-08	12,695	2,266	3,461	806	
Mar-08	11,890	2,198	3,245	618	
Apr-08	10,901	1,960	3,420	693	
May-08	15,927	2,409	4,003	906	
Jun-08	11,642	1,461	3,052	703	
小計	615,258	323,777	400,917	64,923	
中計		939,035		465,840	
総計				1,404,875	

図6 アクセス数集計

そうだったか分からない。新聞や雑誌などで紹介されたのだろうか。その後しばらくそのアクセス数を維持していたので、何故そうだったのか、管理者としては是非知りたいところである。

懸念事項もある。2007年7月から2008年6月までの直近1年間の総アクセス数が、その1年前の2006年7月から2007年6月までと比較すると、1日あたりのアクセス数が、本データベースは557.2

件、超高精細画像データベースは304.8件あったものが、それぞれ506.0件と203.8件に、10%~30%超までの落ち込みを示している。何か由々しき事態が発生しているのではないかと危機感を募らせているところである。

4. 2 利用状況：古写真の利用形態

本学の「幕末・明治期日本古写真コレクション」は、データベース公開により、インターネットで簡単に検索ができ、直接画像が確認できる。その結果、各方面から多数の利用申し込みがある。年間利用件数は、概ね90件から100件前後で推移していたが、平成19年度は162件と大幅に増加した。平成20年度もそれを上回る勢いで利用の申し込みが相次いでいる。これは、平成18年度における本データベースの公開が、平成19年度になって現象として現れたものと推察できる。

平成19年度の利用を形態別に見ると、新聞・雑誌・書籍など印刷物への掲載が最も多く72件である。次いで、テレビ番組への利用が35件と、かなりの数に上る。さらに、博物館やイベントでのパネル展示が18件、研究資料としての利用が15件、HPやブログなどWebでの利用が11件、ビデオ・DVDなど映像への利用が5件と続く(図7)。

印刷物への掲載では、昨年来の江戸・幕末ブームのためか、歴史関係教養書への利用が増えている。古写真は幕末以降に写されたものであるが、江戸の文物も多く見られる。たとえば町人や侍の衣服や髪型や持ち物、代表的な職業、城や寺社な

どの建物、あるいは浮世絵さながらの風景などである。そのため、古写真は幕末・明治時代はもちろん、江戸時代を説明する資料としてもしばしば用いられる。また、明治24年の濃尾地震の写真が26枚あるが、これらは地震関係の書籍や防災関係の雑誌などで取り上げられている。

テレビ番組への利用では、クイズ番組や情報番組などに頻繁に利用される。また、報道関係で過去の出来事にふれる際、当時の風景や風俗を示す資料として使われる。ドラマ内で小道具的に使用されることもある。

展示関係の利用では、各地の博物館や教育関係機関からの依頼がある。古写真には日本各地の風景や風俗が写されており、古写真そのものとして、あるいは時代背景を説明する資料として、展示パネルや上映用のビデオなどに活用されている。最近では海外の博物館や美術館からも図録掲載などの依頼がある。

また、当館は古写真を通じて地元の観光や文化と深く関わっている。市内で展示会を開催し、好評を博しているが、「出島」などの観光施設や各種のイベントに古写真パネルを貸し出すことも多い。市内の名所旧跡の案内板に当館の古写真が利用されることもあり、長崎市のボランティアガイドにより観光案内の資料としても利用されている。

研究資料としての利用は歴史関係に限らない。写真は建物の細部を正確に写しているため、街並みや建築物の調査には最適の資料となる。また、写真には撮影者の意図しない細々した情報が写っていることも多い。古写真を研究資料として利用する人が注目するのは、地理、樹木の様子、人間の体格、衣服、道具など、千差万別である。毎年数件ではあるが、学生の論文にも利用される。

教育研究目的の利用は、論文など印刷物への利用も含め、全体の2割ほどである。教養書や雑誌、テレビ番組等への利用が多い理由は、検索が簡単で問い合わせ先が明確なこと、利用許諾が得やすいこと、デジタル画像をインターネットで迅速に提供することが可能なためであると思われる。

科学研究費補助金という学術振興を目的とする

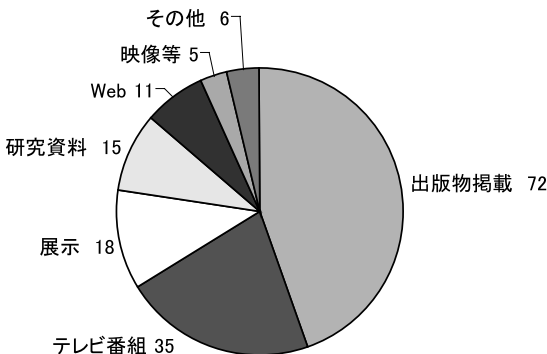


図7 古写真の利用形態別件数

公的資金で構築したデータベースであるが、幅広い分野で多くの人びとに愛用されているのは、提供者として誠に喜ばしいことである。

5. 今後の展開

平成18年度に、長崎、熊本、鹿児島など九州各地の古写真124点を購入した。平成19年11月には、これらの一部を長崎市内の百貨店を会場にパネル展示して公開し、併せて「明治七年の古写真集」として当館初の写真集を発刊した。しかしながら、このコレクションは未だ本データベースへの登録に至っていない。平成20年度中の登録・公開を目指して、電子ファイルへの媒体変換を終え、日本語タイトルや解説を付ける作業、英語翻訳する作業を順次進めているところである。

平成19年度には、本学にとってのみならず、日本にとって歴史的価値の高い古写真コレクションを購入した。20年ほど前に日本に初めて紹介され、当館の古写真収集を触発したばかりでなく、全国的な古写真ブームの火付け役となった「ボードインコレクション (Bauduin Collection)」である。収集したオランダ人医師アントニウス・ボードイン (Anthonius Franciscus Bauduin) は幕末に本学医学部の前身である「養生所」の2代目教頭(今でいう校長)として来日した。その後、大阪大学や東京大学のそれぞれの前身校で医学教育に尽力した。この間に自ら撮影し収集した古写真がこのコレクションの核となっている。長崎大学にとっても、交流400年を迎えた日蘭両国にとっても「歴史の証」として極めて貴重なコレクションである。ボードインの子孫により大切に保管されていたアルバム4冊の古写真527点が当館のコレクションに新たに加わった。

これを本データベースに追加することは勿論であるが、新規のデータベースとして構築することも計画している。計画の一端を紹介すると、全527点の古写真画像を掲載し、地域、風景、人物などの被写体別のカテゴリーに分けた見せ方を考えている。直感的にブラウジングできるようなインターフェースを作っていきたい。また、超高精

細画像データベースで培ったノウハウをもとに、古写真画像の拡大表示の仕掛けを組み込むつもりでいる。さらに、古写真に写った150年前の長崎の街並みと現在の街並みを対比して見られるようにすることも予定している。この新規データベースは、平成20年10月に、長崎歴史文化博物館でボードインコレクション展を開催し、オランダから子孫を招待して各種セレモニーを行うのにあわせて公開することを目指している。

平成20年度に、当館の古写真データベースは、本データベースと超高精細画像データベース、ボードインコレクションデータベースの3本立てとなる。本データベースは、所蔵古写真の全点を収録し、重要な写真の高精細な画像を搭載した後2者のポータルとなる。これらのうちボードインコレクションは新規構築するものである。一方、超高精細画像データベースは、平成15年の公開で、既に5年の年月が経っている。平成21年度以降に拡充リニューアルを行いたいと考えている。

6. まとめ

上述のように当館の古写真データベースは古写真の利用や収集と密接に繋がっている。十分な利用実績を受けて、収集から公開までのサイクルが大学全体の中期計画や年度計画に位置付けられた活動として形成されつつある。法人化によって、社会貢献が国立大学の新たな使命としてクローズアップされている。また、大学の個性化が求められている。古写真データベースは、長崎大学のホームページに掲げられている「長崎学デジタルアーカイブズ」の主要なコンテンツとして、本学の社会貢献や個性化の柱のひとつとなっている。

平成20年度当初の時点で当館の古写真所蔵数は6,990点に達した。20年間の収集活動と10年間のインターネット公開の実績により、当館の古写真コレクションとデータベースは、国内トップレベルに位置すると自負している。サーチエンジンで「古写真」を検索すると、必ず上位にランキングヒットする。最近では、海外の個人宅に長く保管されていた古写真アルバムの寄贈を受けるという

こともあった。当館の古写真コレクションとデータベースが国内外に広く認知されている証だと思う。長崎大学附属図書館は、その期待に応えるべく、収集・整理・保存・公開の役割と責任を果たしていかなばならない。今後も質・量の拡充を図り、その成果を社会に還元していきたい。

(しもだ けんいち、ひらばやし のぼる、やぎゅう のりこ、みやわき ひでとし、しばはら ともみ)

<参考サイト>

- 1) 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース
<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/>
- 2) 幕末・明治期日本古写真超高精細画像データベース
<http://zoomphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/>

Metadata Database of Japanese Old Photographs in Bakumatsu-Meiji Period

(By Kenichi Shimoda, Noboru Hirabayashi, Noriko Yagyu, Hidetoshi Miyawaki, and Tomomi Shibahara, Nagasaki University Library)

The Nagasaki University Library established the “Metadata Database of Japanese Old Photographs in Bakumatsu-Meiji Period,” an image database of early Japanese photographs conformed to the Dublin Core element set and the Open Archives Initiative Protocol for Metadata Harvesting (OAI-PMH), and made it public via the Internet. Since then, this database and the existing “High-Definition Image Database of Old Photographs of Japan” have been conveying a vast amount of information on Japanese modernization and attracting a huge number of visitors from home and abroad. The success of these distinguished websites has become one of the most significant achievements of our University and also a great contribution to society. The article reports, from the point of view of librarians, what this database is for, how it was constructed, how it has been used, and in what way it will be more useful.